

〔研究ノート〕

精神分析的乳児観察と調査・研究

鵜飼 奈津子

はじめに

精神分析的乳児観察については、これまで我が国においても様々な文献で紹介されている（平井 1993，小此木 1994，鵜飼 2002 他）。また，その実践については，東京・名古屋・京都・大阪などの地域において，英国で乳児観察の訓練を受けたものを講師とするセミナーが開催されており，長いところでは20年以上の経験が積み重ねられている。そのような中で，観察例がその応用例も含めて関連学会で発表される機会も増えてきていることから，精神分析臨床を専門とする臨床心理士や精神科医の間では，より広く認識されるようになってきていると言えよう。

本論ではまず，もともとは子どもの精神分析的な心理療法士の養成訓練を目的に始まった乳児観察の訓練としての歴史と現状について振り返り，次にその応用としての治療的観察について述べる。そして最後に，乳児観察訓練によって培われる能力と技術が，臨床場面のみならず，より幅広い領域で応用可能であるという仮定に基づいた，あらゆる分野の調査・研究について触れる。

1. 精神分析的乳児観察の「訓練」としての歴史と現在の位置づけ

(1) 「訓練」としての歴史

精神分析的乳児観察は，1948年，英国の Tavistock Clinic の Bick, E. により，子どもの精神分析的な心理療法士の養成のための訓練の一環として，その訓練に入る際の入門的な位置づけとして確立された。1960年には，Institute of Psychoanalysis により，精神分析家養成のための訓練にも導入される。こうした黎明期には，乳児観察という体験における訓練の意義は，子どもの非言語的な行動や遊びを理解することはもとより，話すことも遊ぶこともしない子どもの行動について，より理解することができるようになることが期待される（Bick, 1964）とまとめられた。

以後，現在に至るまでには，たとえばアートセラピストやミュージックセラピストなどの専門職の養成課程のほか，保育士や看護師，保健師，教師，医師，また，知的障害児や子どもと家族を専門とするソーシャルワーカーなど，その養成課程に乳児観察が含まれていない専門職の卒後訓練など，より広くあらゆる臨床訓練の応用として活用されるようになってきている。ただし，これらの訓練では，観察の期間を原則に従って2年間とするものも

あれば、1学年度で数セッション～10セッション程度を行うものまで幅広い。

このように、時代の流れの中で訓練の幅が変化、多様化してきているとはいえ、乳児、そして乳児の母親やその他の家族メンバーとの相互作用について、彼らの自宅において、その誕生から、毎週、観察をするという体験そのものが、この訓練の核であることには変わりがない。

（2）訓練としての意義に関する認識の変化

Bick が乳児観察を子どもの精神分析的な心理療法士の養成課程に組み込んだ際に強調していたのは、先記のように、乳児の発達についての理解を得ること、特に乳児の非言語的コミュニケーションと、家族の中でどのように関係性が発達していくのかについて学ぶことであった。これはつまり、私たちが日常の臨床の中で出会うクライアントの中の乳児的な部分に、より繊細に触れられるように、早期の前言語の発達や経験を理解するための能力の向上が目指されていたということである。

しかし、しだいにこうした観察に伴う学びの体験が認識されるようになっていった。特に、新しく母親になった人と乳児の近くにいることで受ける、強力な情緒的インパクトをいかに扱うのかが注目されるようになっていった (Bick, 1964, Briggs, 2002)。また、観察者がわからなさを持ちこたえる能力を発達させ、結論に達することや早まった解釈に至る前に振り返る時間を持つ機会であるということも気づかれるようになってきた (Klauber & Trowell, 1999)。そして、最近の20年ほどの間には、観察者が様々な感情にさらされる体験こそが、心理療法の仕事をする上で欠かすことのできない能力の発達を促進するものであるという点に、より注目が集まるようになってきた。

現在では、観察者は、親－乳児の相互作用の複雑さや情緒的インパクト、そして自身に喚起される複雑な情緒をコンテインする必要性をも知る機会になると考えられるようになってきている (Sternberg, 2012)。このことは、心理療法のプロセスにおいて、逆転移（心理療法士に引き起こされるあらゆる感情）に気づき、それを用いることを大切にするという、精神分析の一派の伝統的な考え方ともパラレルなものであるといえよう。

（3）訓練における意義に関する調査・研究

Sternberg, J. (2012) によると、精神分析的な心理療法の訓練は、スキル指導にはほとんど重点を置かず、その期間の中で訓練生がそれぞれの能力を発達させるように機能する、いわゆる徒弟モデル (apprenticeship model) と、理論的学習の組み合わせである。そこで、訓練の一部としての乳児観察の体験は、特に感情に気づき、それに耐え、内省すること、そして強力な情緒的体験を通して、そこにある意味を考え続けるといった能力と、こうした特定の思考様式を体験的に身につけるといった文脈で機能すると考えられている。ここで起こる学びは、情緒的な学びであり、Bion, W. (1962) が、何かについて学ぶことよりも経験から学ぶこととして述べているものであるといえよう。たとえば、こうして体得された観察の技法は、心理療法士としての技能、特に親子心理療法や自閉症をもつ子どもの心理療法など、従来の心理療法の枠を超えた応用が求められる領域において、より貢献するものであると考えられる。

しかし、Sternberg (2012) は、こうした訓練の現代的意義について検討する中で、訓練生自身が精神分析を受けること、精神分析の理論学習を行うこと、そしてワークディスカッションへの参加など、他の精神分析的インプットがない場合には、乳児観察の貢献がそれほど有効ではなくなるであろうとも指摘している。つまり、乳児観察の体験は、それ単独でも十分に意義のある体験ではあるが、同時に他の様々な精神分析の体験的学習が伴って初めて、最大限にそのメリットが発揮されるということなのかもしれない。

2. 乳児観察の方法

乳児観察の方法については、冒頭で触れたように、これまでも様々な文献において紹介されてきているが、ここでも簡単にまとめておく。

(1) 観察を始める前に

訓練生は、まず、観察に同意し、協力してくれる家庭を探すことになる。この際、友人や知人等、直接、観察者と日常的なコンタクトのある家庭は避ける必要がある。これは、観察者ができる限り中立的な立場で、観察者という立ち位置を保持するために必要なことである。また、後述の治療的观察とは異なり、訓練生は普通のほどよい子育てを受けることになるであろうと思われる赤ん坊を観察する。つまり、臨床場面で出会うことになるような何らかの問題を抱えた子どもとその家族、あるいは明らかなリスクがありそうな家庭を観察するのではなく、おそらくは大きな問題を抱えてはいないであろうと思われる家族の中で、子どもがどのように成長・発達していくのかを観察するということである。

協力家庭が見つければ、赤ん坊が誕生して観察を開始する前に家庭を訪問し、観察について、家族からの質問に答えつつ丁寧に説明することによって、観察についての同意を得る。

(2) 観察の実際

観察は、赤ん坊の生後間もなくから満2歳になるまで、家庭訪問により、毎週1回、約1時間、定期的に行う。観察は、ビデオ撮影をしたりメモをとったりしながら行うといったいわゆる「実験室」における観察手法とは異なり、観察者の心（自由に漂う注意）を使う観察手法をとる。これは、調査・研究領域では「自然主義的观察」と呼ばれる方法である。

観察時には、乳児の心身の発達とともに、家族との関係性にも注目するが、同時に、観察者自身の中に起こってくる感情にも注目する。観察者は、観察に集中することで、まさにそこで起こっていることについてありのままに観察するという能力を高めることを目指す。また、乳児と家族を観察することで生じる観察者の情緒体験に注目することも主眼の一つとされる。さらに、観察者にとって重要な態度として、観察者はあくまでも乳児の発達について学ぶために観察を行うのであり、専門家として家族に対して何らかの介入をしたり、助言をしたりするような立場にあるのではないという姿勢を保つことである。このことは、観察を開始する前に観察家庭にも説明し、了解を得ておく必要がある。

毎回の観察終了後には、観察者の体験や感情も含めて、できるだけ詳細に記録を作成し、週1回のセミナーグループ（講師1名につき、メンバーは5人程度）においてこれを検討

する。このセミナーグループは、観察者自身が体験を消化し、考えられるものにしていくプロセスを担うものであると同時に、他の観察者の体験と比較しながら、自身の観察する乳児と家族、そして自身の体験について振り返り、検討する機会にもなる。セミナーに参加するメンバーは、それぞれの観察体験と照らしながら、発表される観察記録についての自分自身の考えや気持ちについて発言する。それによって、参加者相互の学びの体験が広がり、深められる。セミナー講師の役割は、こうしたグループでのディスカッションにおいて明らかになってくることをまとめていくことである。観察された家族のそれぞれについて、また家族メンバー相互の関係性、そして赤ん坊の発達やそこで起こっていることの意味について、幅広く検討し、まとめ上げていくこともまた、講師の重要な役割であるといえよう。

2年間の観察の終了に向けては、終結をいかにとらえ、迎えるのかといった心の準備が、観察者のみならず被観察家庭にとっても大きなテーマとなる。このプロセスはまた、心理療法の終結を迎える心理療法士とクライアントとの間に起こる心のプロセスとも類似のものであるといえよう。

また、こうした2年間の観察の体験について、終了後に論文にまとめたり学会等で発表したりする機会を持つことは、観察者自身が体験を振り返り、考える良い機会になるものとして、推奨されている。

(3) 観察者の被観察家庭における役割

観察者としての存在感は、赤ん坊にとっては、そこで起こっていることに関心を持ち、理解しようとするまなざしとして体験される（無意識のコミュニケーション）ものであろう。これはまた、赤ん坊のこころを抱える存在（コンテイナー）としても機能する、発達促進的なものであるとも言えよう。一方、母親にとっての観察者は、専門的なアドバイスを与える助言者、あるいは育児を助けるベビーシッターなどとは異なり、批判的でも教育的でもない第三者という存在として、やはり抱える存在として機能するものと思われる。

つまり、観察者は、家庭の中に侵入する他者としてではなく、主には母子という二人だけの密室に外部からの風穴を開ける第三者として、また、そうした母子の空間を抱える第三者として機能するのだと考えられる。

(4) 乳児観察が精神分析理論に貢献できること

それでは、こうした乳児観察が、精神分析理論に貢献できることとは、何であろうか。

観察者の感情は、部分的には被観察者の情緒的体験のコミュニケーションの可能性だと見なされる。これは、Bion (1962) で言うと、赤ん坊が不安や強烈な情緒的体験を、母親に調節し、消化してもらおうというコンテインメントを求めて行うコミュニケーションの反映であり、Winnicott, D. W. (1984) で言うと、赤ん坊が自分で経験について考えることができ、対処することができるようになるまでの間の「抱っこ (holding)」であるといえよう。こうした最初の関係の親密さの中で起こる精神的、情緒的生活の根源について、より理解を深められる可能性こそが、乳児観察が精神分析の実践に貢献するものであると示唆される。

ただ、一方では、乳児観察と精神分析的実践とは全く別のものであり、互いに貢献できるものではないという議論もある (Rustin, M., 2012)。この点に関しては、本論の域を超えるので、また別の機会に論じてみたい。

3. 訓練としての乳児観察から治療的乳児観察へ

以上、乳児観察の精神分析的心理療法やその他の対人援助職にとっての訓練の意義と、その実際の方法について述べてきた。また、2(3)で触れたように、被観察家庭にとって、観察者を受け入れるという体験それ自体が成長促進的なものであり、抱えられる体験であるようだというのが、長年の乳児観察事例の蓄積から明らかになってきている。そこで、治療的乳児観察という実践が始まっている。

(1) 治療的乳児観察

治療的観察とは、1940年代に導入された訓練としての乳児観察のモデルから、臨床的介入として発展したものであると定義されている (Wakelyn, 2012)。その基本原理は、観察それ自体が、多くの家族にとってコンテイン、あるいは支持的になり得るというものである。つまり、観察がもたらすコンテインメントが、乳児-養育者の対の、より深い情緒的な接触を促進し、それが相互作用がうまくいかなかった際の悪循環を止めるのに役立つというものである。また、あらゆる状況における乳児のコミュニケーションを理解しようとする観察者の試みが、親がそれと同じことをするのを奨励する (Rhode, 2007) という考えに根ざす。こうした治療的観察においては、すでに訓練を受けた経験豊富な観察者が、受容的かつ積極的な役割を担い、臨床的ニーズがあるとされる家庭を対象に行う。また、そこには当初の教育的な目的を持つ乳児観察とは異なる焦点を持った、スーパーヴィジョンの形が求められる。

治療的乳児観察は、まずフランスで Houzel, D. と Delion, P. によって導入されたが、この介入の原則と実践について Houzel (1999) は、その費用対効果とともに、クリニックに出向くことが難しい家族にもサービスを提供できるという利点を主張している。また、他の養育と同様に、発育不全や発達の変異、自閉症スペクトラム障害のリスクを持つ乳幼児など、多種多様で深刻な問題に対する援助方法としても励みになるものであると結論づけている。現在では、こうした治療的観察は、フランスの地域児童精神医学サービスの一部門に組み込まれており、特に自閉症もしくは心理社会的困難を持つ乳児に対する多職種治療において、費用対効果の高い構成要素として確立されている。この方法は、臨床的ニーズに対する迅速な対応を可能にし、クリニックに通うことが難しい家族に受け入れられている (Houzel, 2010) ということである。

一方、訓練としての乳児観察を創始した英国においても、後述の通り、子どもに応答する親の能力が十分に発揮されていないと考えられるあらゆる環境において、こうした介入が役に立つことが証明されてきている。

(2) 治療的乳児観察に求められる観察者の態度

では、こうした治療的乳児観察を行う観察者に求められるものは、こういった能力であ

り、感受性なのであろうか。この点について、Houzel (1999) は以下のようにまとめている。

- ① 「知覚」的感受性：行動の連続性とそこに細やかに注意を向ける観察者の能力である。これは、観察後のセミナーで考え、意味づけしていくことでもある。
- ② 情緒的感受性：観察者の親に対する感受性と、乳児に対する感受性である。これはいずれも、親にとってモデルとして働き得る。親は、観察者の感受性のあり方に同一化し始め、自身が子どもに注意を向ける力がいかに大切なものであるのかを理解し始めるようになる。そして、親は、子どもの症状や欠損がすべてではないと感じ始めることができるようになる。
- ③ 「無意識」の感受性：意志の努力を通して成し遂げられるものを越えて、観察者がより深いレベルでのコミュニケーションに開かれていることである。観察者には、意識的には気づいていない印象や反応を処理し、定式化することが求められる。そのため、スーパーヴィジョンやセミナーの場が、こうした介入を支える上での本質的な役割を担うことになる。特に、子どもが病気であったり、もしくは親と子どものコミュニケーションの失敗を目撃し、それぞれが苦しんでいる様子から観察者が自分を切り離せないでいたりする場合には、観察者は意識的にもしばしば痛みを伴う感情を体験するであろう。観察者がそうしたことの要因となる相互作用を概念化し、そこでいかに最善の応答をするのかについて考慮するためには、そのための討論の時間と場が必要不可欠である。この点は、Houzel の意見の中で最も重要な要因であると思われる。

(3) 治療的乳児観察の実践例

それでは、これまでにどのような治療的乳児観察が行われてきているのか、その実践例を挙げる。

治療的乳児観察を用いた初期の研究の多くは、未熟児に関するものであった。たとえば、未分化で断片化した原一精神的な (proto-mental) 意識が徐々にまとめられていく際の段階を確認したもの (Lazar & Ermann, 1998) や、食べ物を拒否し成長することができないでいる乳児に対する介入の一部としての治療的乳児観察の報告 (Berta & Torchia, 1998) などがある。また、しばしば自閉症のような症状を呈するウエスト症候群の診断 (通常はコルチゾン治療を行う退行性の神経学的状態) を持つ7か月の赤ん坊の事例報告 (Lechevalier, Fellouse & Bonnesoeur, 2000) では、当初は脳波に異常が見られたこの赤ん坊が、6か月の観察の後には脳波が正常になっていたことがわかったとされている。これは単一事例ではあるが、報告では、このような事例が明らかに重要な意味を持つことが強調されている。

この他、英国では、赤ん坊の先天的病気、子どもが皆、公的保護に入るという世代間の問題、また赤ん坊の生き残りに深刻な懸念を引き起こすような発育不全の事例 (Rhode, 2007) などにおける治療的観察例が報告されている。

(4) 自閉症研究としての治療的観察例

ここでは、自閉的発達パターンリスクが懸念されたために選ばれた乳児と母親につい

て、スーパーヴァイズを受けながら行われた、英国における治療的観察の報告についてまとめる (Rhode, 2012)。

本報告では、赤ん坊と親密に関わろうとする際の母親の困難と、それが乳児におよぼす影響、そして観察者の注意深さと包容の存在を通して与えられる援助のあり方というエビデンスが提示されている。特に後者については、観察が、赤ん坊の要求によって引き起こされる母親の不安を軽減し、母親が赤ん坊との間に生き生きとした心地よい関係を確立することができるようになっていくことに寄与したとされている。また、注意深く観察介入を行うことが、母親と赤ん坊が互いに関わるための潜在的な力を解き放ち得ることを示したという点で、自閉的な乳児の相互作用のパターンについての児童発達実験研究、および臨床実践を補完するものになったと結論づけられている。

さらに、たとえば焦点の合わない一瞥が恐怖のマスクであると考えられる子どもや、CHAT のハイリスク・カテゴリーに入る子どもたちが、検査では示すことのできない能力を持っていることが観察を通じて見出される割合を検討することが、今後の興味深い精査課題であることが示唆されている。

このように、治療的乳児観察は、現在、それが始まったフランスのみならず、英国においても乳幼児精神保健の仕事の中核的実践の1つとして認められるようになっている (Emanuel & Bradley, 2008)。

4. 乳児観察/治療的乳児観察から調査・研究へ

それでは、これまでに蓄積されてきた乳児観察および治療的乳児観察は、調査・研究の一手法として成り立ちうるものであろうか。Rustin, M. (2006) は、乳児観察が、精神分析的研究の一つの形としての可能性を有していると指摘している。たとえば、明確に確立された手順があることから、乳児観察それ自体が1つの調査・研究手法であると主張する。ここでいう手順とは、具体的には以下のようなことである (Rustin, 2012)。

- ・毎週1時間の定期的な家庭訪問が、2年間にわたって継続されること。
- ・観察には、一定のスタンスが保たれていること。つまり、観察者が、友好的ではあるが中立的であること、介入をしたり何かを教えたりはしないこと、そして観察者自身の反応を道具としてそこに包摂することである。
- ・観察後に詳細な記録を起こすこと。
- ・セミナーグループで記録についてのディスカッションを行うこと。

さらに、トルコ、台湾、オーストラリア、アルゼンチンといった世界の各地で乳児観察を教えた経験のある英国の指導者は皆、この同じ手法を用いることで同じ結果が得られることから、乳児観察は、地理的・文化的境界を越えて共通の、情緒発達についての調査・研究手法であるといえるとしている (Rustin, 2012)。

(1) 乳児観察の調査・研究手法としての方法論

それでは、乳児観察を調査・研究手法として考える際に取られる可能性のある方法論には、どのようなものがあるのだろうか。

一般に、観察をベースとする調査・研究におけるデータ（観察記録）の分析方法には、グラウンデッド・セオリーによるデータ分析や、単一事例研究が挙げられる。英国ではすでに、乳児観察事例について、グラウンデッド・セオリーを用いた分析（Wakelyn, 2012）や、単一事例研究（Shallcross, 2012）等が報告されている。

ただ、乳児観察の手法は、先記の通り自然主義的方法であるため、その観察記録を実験的方法で得られたデータのようにそのまま用いることには不向きである。そこで、乳児観察の記録を使用可能にする方法を見出すことが課題となる。たとえば、Briggs, S. と Behringer, J. (2012) は、ある設定場面における仮説を検証する際に必要な段階を以下のように同定し、すでに②までのプロセスを公表している。

- ① 乳児期早期における親－乳児間の相互作用を評価するための場面設定を行う。
- ② 親－乳児間の相互作用（たとえば、コンテイナー－コンテインドモデル）を評価するための得点化の枠組みや、尺度を開発するのに適した実験デザインを確立する。
- ③ ①②の段階の成果を基礎に、乳児期早期の相互作用と、乳児期後期の愛着形成の組織化との関係に関する、長期にわたる研究の立案を行う。

（２）新たな下位領域への広がり

現在までにおこなわれている調査・研究には、次のようなものがある。

たとえば、最初の２年間に確立された乳児の特徴がその後も比較的安定したものであることを探索するフォローアップ研究（Diem-Wille, 1997）や、10代の母親に関する研究（Roper, 2009; Thomas, 2009; Waddell, 2009）などのように、特定の乳児－母親の体験に焦点を当てたものの他、保育所（Datler, Datler & Funder, 2010; Elfer, 2010）や学校（Briggs & Ingle, 2005）など、観察を行う設定を家庭の外へと拡張したものもある。さらには、治療的乳児観察の応用と展開に当たると考えられるものには、病院に入院している乳児の観察（Cohen, 2003; Mendelsohn & Phillips, 2005）、里親養育を受ける乳児の観察（Wakelyn, 2012）、そしてあらゆる発達課題を抱えた乳児など、他の方法では侵襲的になりすぎる危険性があるところでの計画的な観察事例が積み重ねられている。

一方、他領域との関連性が高い調査・研究には、乳児観察の方法と人類学的方法を統合したロンドンのモスクでの観察（Shuttleworth, 2010）、乳児観察的方法を組織プロセスそのものという文脈に広げたもの（Hinshelwood & Skokstad, 2000）、観察対象を乳児期という段階を超えた年齢層に広げ、かつ組織観察も取り入れた老人ホームでの観察（Davenhill, 2007; Datler, Trunkenpolz & Lazar, 2009; McKenzie-Smith, 2009）などがある。また、女性が母親になることでの同一性の変容（Urwin, 2012）や、集団内の赤ん坊（Bradley, et al, 2012）といったトピックの広がりも見られる。

おわりに

英国では、J. Bowlby や J. Robertson & J. Robertson, また最近20年以上にわたる縦断研究の成果が公表された M. Rutter ら（2017）の調査・研究が社会政策の変換に大きな影響を与えてきた伝統があるが、これら乳児観察手法を用いた調査・研究についても、やはり

社会政策の変換を目指したエビデンスとして用いられるようになっている。近年では、本文で取り上げたような養子・里子のシステムに対する問題提起や、自閉症を持つ子どもとその家族に対する援助システムの再構築がその例である。さらに、これもまた多文化・異文化共生が当たり前のようになってきている英国ならではのことかもしれないが、観察者が自らとは異なる文化について学ぶ機会として、乳児観察の方法の応用が認識されるようになっている。

我が国においては、訓練としての乳児観察を終えた臨床家が、主にスクールカウンセラーとしてのクラス観察の試みを始めていること (Kanazawa, et al 2009, 鈴木 2010, 藤森 2012, 林 2017), また乳児観察の手法をモデルにしたワークディスカッション (Rustin & Bradley, 2008) が紹介されるなど、今後の広がりが期待されるところである。

参考文献

- Berta, L. & Torchia, A. 1998 The contribution of infant observation to paediatrics. *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 2, 79-89
- Bick, E. 1964 Notes on Infant Observation in Psychoanalytic Training. *Int. J. PsychoAnal*, 45, 558-566
- Bion, W. 1962 A theory of thinking. *Int. J. PsychoAnal*, 43, 306-310
- Bradley, B.S. et al, 2012 Group life in babies: Opening up perceptions and possibilities. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- Briggs, A. 2002 Surviving Space: Papers on Infant Observation. Karnac
- Briggs, S. & Ingle (Eds), 2005 Application of Infant Observation to work in educational settings. *Int. J. of Infant Observation*, 8, 1-102
- Briggs, S. & Behringer, J. 2012 Linking infant observation research and other paradigms. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- Cohen, M. 2003 Sent Before My Time: A Child Psychotherapist's View of Life on a Neo-Natal Intensive Care Unit. Karnac
- Datler, W., Datler, M. & Funder, A. 2010 Struggling against a feeling of becoming lost: A young boy's painful transition to day care. *Int. J. of Infant Observation*, 13, 65-84
- Datler, W., Trunkenpolz, K. & Lazar, R. 2009 An exploration of the quality of life in nursing homes: The use of a single case and organisational observation in a research project. *Int. J. of Infant Observation*, 12, 63-82
- Davenhill, R. (Ed) 2007 Looking into Later Life: A Psychoanalytical Approach to Depression and Dementia in Old Age. Karnac
- Diem-Wille, G. 1997 Observed families revisited –two years on. A follow-up study. *Developments in Infant Observation. The Tavistock Model*. Routledge
- Elfer, P. 2010 The power of psychoanalytic conceptions in understanding nurseries. *Int. J. of Infant Observation*, 13, 59-64
- Emanuel, L. & Bradley, E. 2008 What Can the Matter Be? Therapeutic Interventions with Parents, infants and Young Children. Karnac

- Hinshelwood, R. D. & Skokstad, W. 2000 Observing Institutions: Anxiety, Defence and Culture in Health Care. Routledge.
- 藤森旭人 2012 スクールカウンセラー活動におけるクラス観察の試み—タビストック方式乳児観察を応用して. 日本心理臨床学会第31回秋季大会発表
- 林秀樹 2017 学校臨床における精神分析的視点—タビストック方式乳児観察を用いたクラス観察から. 日本精神分析的な心理療法フォーラム第6回大会発表
- 平井正三 1993 タビストッククリニック方式乳児観察の一事例. 臨床心理事例研究 20, 31-40
- Houzel, D. 1999 A therapeutic application of infant observation in child psychiatry. *Int. J. of Infant Observation*, 2, 42-53
- Houzel, D. 2010 Infant observation and the receptive mind. *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 13, 119-133
- Kanazawa, A., Hirai, S., Ukai, N., Hubert, M. 2009 The application of infant observation as a means of assessment and therapeutic intervention for 'classroom break-down' at a school for Japanese-Koreans. *Int. J. of Infant Observation and its Application*, 12(3), 335-348.
- Klauber, T. & Trowell, J. 1999 Editorial. *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 2, 2-3
- Lazar, R.A. & Ermann, G. 1998 Learning to be: The observation of a premature baby. *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 2, 21-39
- Lechevalier, B., Fellouse, J.C. & Bonnesoeur, S. 2000 West's Syndrome and infantile autism: The effect of a psychotherapeutic approach in certain cases. *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 3, 23-38
- McKenzie-Smith, S. 2009 Observation study of elderly: An applied study utilising Esther Bick's infant observation technique. *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 12, 107-115
- Mendelsohn, A. & Phillips, A. (Eds) 2005 Babies in hospital. *Int. J. of Infant Observation* 8(3)
- 小此木啓吾編 1994 乳幼児精神医学の方法論. 岩崎学術出版社
- Rhode, M. 2007 Helping toddlers to communicate: Infant observation as an early intervention. Autism in infants: Detection and Early Intervention. 193-212. Karnac.
- Rhode, M. 2012 Infant observation as an early intervention: Lessons from a pilot research project. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- Roper, F. 2009 Riding the rollercoaster: An infant observation of a teenage couple and their baby. *Int. J. of Infant Observation*, 9, 283-294
- Rustin, M. & Bradley, J. 2008 Work Discussion. Karnac. 鈴木誠・鶴飼奈津子監訳 2015 ワークディスカッション. 岩崎学術出版社
- Rutter, M. et al 2017 Child-to-adult neurodevelopmental and mental health trajectories after early life deprivation: the young adult follow-up of the longitudinal English and Romanian Adoptees study. [http://dx.doi.org/10.1016/S0140-6736\(17\)30045-4](http://dx.doi.org/10.1016/S0140-6736(17)30045-4)
- Thomas, L. 2009 Jack – an observation of a baby with adolescent parents. *Int. J. of Infant Observation* 9, 295-304
- Rustin, M. J. 2006 Infant observation research: What have we learned so far? *Int. J. of Infant Observation and its Applications*, 9, 35-52
- Rustin, M. J. 2012 Infant Observation as a method of research. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.

- Shallcross, W. 2012 What can be learned from a single case of psychoanalytic infant observation? In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- Shuttleworth, J. 2010 Faith and culture: Community life and the creation of a shared psychic reality. *Int. J. of Infant Observation*, 13, 45-58
- Sternberg, J. 2012 Why the experience of infant observation lies at the heart of psychoanalytic psychotherapy training. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- 鈴木誠 2010 危機状態の教職員集団へのコンサルテーション—学校への支援に活かす精神分析臨床心理学10(4), 512-518
- 鵜飼奈津子 2002 Tavistock Clinic における Infant Observation の経験. ヘルメス心理療法研究 7, 53-65
- Urwin, C. 2012 Using surprise in observing cultural experience. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- Waddell, M. 2009 Why teenagers have babies. *Int. J. of Infant Observation*, 12, 271-282
- Wakelyn, J. 2012 A study of therapeutic observation of an infant in foster care. In *Infant Observation and Research*. Urwin, C. & Sternberg, J. (Eds). Routledge.
- Winnicott, D.W. 1984 The theory of the parent-infant relationship. *The Maturational Process and the Facilitating Environment*. Hogarth Press.